

「書くこと」指導への一提言

— 読書感想文指導を中心に —

鈴木 恵

1. はじめに

現今の「書くこと」指導において、読書感想文に関する指導は極めて少ないという印象がある。新潟市立新津第二小学校教諭・桑原浩二の論文「書く力を育成する国語科学習指導法の研究—小学校高学年を対象として—」によれば、『月刊国語教育研究』（日本国語教育学会）の第309号（1998年）～第523号（2015年）に掲載された「実践報告」のうち、「書くこと」指導に関する論考は62編であったようである⁽¹⁾。その内訳は、意見文3、小論文2、報告文2、紹介文7、説明文3、感想文1、案内文1、解説文1、鑑賞文2、新聞・ポスター4、手紙3、創作（短歌・俳句・詩・物語・標語）14、随筆1、文集1、スキル学習6、その他11の如くであって、感想文は僅かに1編拾われたものの、それは所謂、読書感想文ではない。

「書くこと」指導に関する、若干の実践例をあげてみよう。

上述した桑原論文では、従来の「書くこと」指導（意見文）の問題点として、「①書く機会と場の適切な設定がなされていない。②スキル学習に終始し、児童が必要感を持って主体的に取り組む学習になっていない傾向が見られる。③文章化過程における「取材」及び「構成」の指導が十分に行われているとは言えない」の3点をあげ、意見文に関する新たな指導法を提案している⁽²⁾。

また、広島県福山市立福山中学校教諭・廣井早世は、その論文「思考力・表現力を高め、伝え合う力を育てる中学校国語科の指導の実際—動機付け・手引き・評価を工夫した「書くこと」の授業づくり—」において、「いわゆる作文指導については、その重要性が認識されているにもかかわらず、これまで着実に行われてきたとはいえない。生徒に書く力を付けてこなかっただけでなく、目的意識のないまま画一的で煩瑣な手順を踏まなければならない学習活動によって、作文嫌いをつくり続けてきたのではないだろうか。書くことが嫌い、苦手という生徒の多くは、その理由として、「書く内容を思いつかない」、「書き方がわからない」ということを挙げている。生徒が内容・方法を主体的に考え工夫しながら書くようにするためには、書いて伝えたいという欲求を喚起するような題材の工夫、ゴールをイメージさせ見通しをもって書くことができる単元構成の工夫などの仕掛けが必要だと考える」と述べ、手紙文指導、紹介文・新聞編集指導について新たな提案を行っている⁽³⁾。

何れの実践例も、児童・生徒の「書くこと」に対するモチベーションを如何に高め、如何にそれを維持するかに腐心していることがわかる。

2. 学習指導要領における「書くこと」の指導事項

次に、現行の『学習指導要領解説・国語編』における「書くこと」の指導事項を、小・中学校を通してまとめてみると、次表のようになる⁽⁴⁾。

	小1・2	小3・4	小5・6	中1	中2	中3
課題設定や取材構成	<p>ア 経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書くこととする題材に必要な事柄を集めること。</p> <p>イ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。</p>	<p>ア 関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること。</p> <p>イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。</p>	<p>ア 考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を集め、全体を見通して事柄を整理すること。</p> <p>イ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。</p>	<p>ア 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめること。</p> <p>イ 集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。</p>	<p>ア 社会生活の中から課題を決め、多様な方法で材料を集めながら自分の考えをまとめること。</p> <p>イ 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること。</p>	<p>ア 社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。</p>
記述	<p>ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。</p>	<p>ウ 書くこととするものの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。</p> <p>エ 文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。</p>	<p>ウ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。</p> <p>エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。</p>	<p>ウ 伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。</p>	<p>ウ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。</p>	<p>イ 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。</p>
推敲	<p>エ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気づき、正すこと。</p>	<p>オ 文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすること。</p>	<p>オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。</p>	<p>エ 書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にすること。</p>	<p>エ 書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して、読みやすく分かりやすい文章にすること。</p>	<p>ウ 書いた文章を読み返し、文章全体を整えること。</p>
交流	<p>オ 書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと。</p>	<p>カ 書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。</p>	<p>カ 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。</p>	<p>オ 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。</p>	<p>オ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げること。</p>	<p>エ 書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めること。</p>

3. 各学年における「書くこと」の言語活動例

さらに、『学習指導要領解説・国語編』における「書くこと」の言語活動例を、小・中学校を通してまとめてみると次表のようになる⁽⁵⁾。

具体的に見ると、小学校低学年では、報告文、記録文、説明文、中学年では、創作（詩・物語）、報告文、学級新聞、説明文、高学年では、創作（詩・短歌・俳句・物語・随筆）、意見文、報告文、編集、PR文、中学校1年生では、鑑賞文、説明文、記録文、案内文、報告文、2年生では、創作（詩歌・物語）、意見文、手紙、3年生では、批評文、編集などが掲げられている。ここに、感想文ないし読書感想文はあげられていない。

言語活動例を要約した文章においても、小学校では「詩や物語など創造的な内容について書くこと、説明や報告、紹介や手紙などの日常生活で活用されるものを書くこと、学級新聞などに表すことなどの言語活動

例を示した」とあり、中学校では「物事について感じたことを書く言語活動、物事を整理し、考えや意見を書く言語活動、事実や思いなどを伝える文章を書く言語活動などを示した」とあるように、読書感想文については全く触れられていない。

小1・2	小3・4	小5・6	中1	中2	中3
ア 想像したことを文章に書くこと。	ア 身近なこと、想像したことを基に、詩をついたり、物語を書いたりすること。	ア 経験したことを、想像したことを基に、詩や短歌、俳句をついたり、物語や随筆などを書いたりすること。	ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと。	ア 表現の仕方を工夫して、詩歌をついたり物語などを書いたりすること。	ア 関心のある事柄について批評する文章を書くこと。
イ 経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章などを書くこと。	イ 疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりすること。	イ 自分の課題について調べ、意見を記述した文章や活動を報告した文章などを書いたり編集したりすること。	イ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。	イ 多様な考えがでる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと。	イ 目的に応じて様々な文章などを集め、工夫して編集すること。
ウ 身近な事物を簡単に説明する文章などを書くこと。	ウ 収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書くこと。	ウ 事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと。	ウ 行事等の案内や報告をする文章を書くこと。	ウ 社会生活に必要な手紙を書くこと。	

4. 国語教科書における「書くこと」指導の実際

それでは、現行の国語教科書において、「書くこと」はどのように取り上げられ、どのように取り扱われているのだろうか。学校図書、教育出版、三省堂、東京書籍、光村図書、各社の教科書（旧版）を分析してみた（6）。

次の表中、○印を付したものは「書くこと」領域単独で立てられたもの、●印を付したものは「読むこと」など他領域のもの、または「書くこと」を含んだ複合領域的な取り扱いがされているものである。小学校1年生の教科書（上巻）は入門期用のものであるためか、「書くこと」「読むこと」などの区別は全く示されていない。なお、●印として取り扱うか否かは、筆者の判断によっている。

○●印の分布を詳細に見ると、小学校においては低学年に○印が多く、学年が上がるにしたがって●印が増加するようにも見えるが、それよりも教科書会社による違いの方が顕著である。すなわち、小学校における総計は○印が209（46.5%）、●印が240（53.5%）であるように、その差は僅かである。しかし、学校図書では○印が53（57.6%）、●印が39（42.4%）であるのに対して、光村図書では○印が29（33.3%）、●印が58（66.7%）の如くであった。特に、光村図書にあっては○印：●印の比が1：2であって、ダブルカウントであった。一方、中学校においては学年毎の特徴はさしてないようであるが、やはり教科書会社による違いが看取された。すなわち、中学校における総計もまた○印が119（48.8%）、●印が125（51.2%）であって、両者にさしたる違いは見受けられないのであるが、学校図書では○印が6（23.1%）●印が20（76.9%）であるのに対して、三省堂では○印が38（64.4%）、●印が21（35.6%）の如くであった。特に、学校図書では○印：●印の比が1：3～4であるように、大差が認められるのである。また、同じ学校図書の教科書であっても、小学校用と中学校用とは、随分と傾向や取り扱い方が異なっていることもわかった。

ただ、厳密に言えば、一瞥してわかるように●印の多くは「学習の手引き」の類である。「学習の手引き」の類は、実は「読むこと」教材（特に物語などの文学的文章）のほとんどに設けられていて、そこには学習者（読者）の読後の感想を導き出し、それを書かせるための問いが数多く用意されている。説明的文章であっても、筆者の主張をまとめたり、学習者の意見を求め、それを書かせようとする問いがしばしば用意されている。「話すこと・聞くこと」領域においても同様である。この「学習の手引き」の類が、●印の数値と比率を押し上げている。このことは、これまでの国語教育が、如何に「書くこと」に主眼がおかれてきたかを示唆するものである。それは、「読むこと」「話すこと・聞くこと」の授業評価もまた、ほとんど「書くこと」によ

て行われてきたことも意味している。

なお、感想文ないし読書感想文に関するものは、2例看取された（下線箇所）。小学校の「物語を読んで、感想文を書こう（三つのお願い）」（光村図書、4年生）と、中学校の「読書感想文を書こう」（三省堂、2年生）であるが、前者は●印を付したことで明かなように、実際には「読むこと」領域として取り扱われているものである。

《小学校》

	小1・2	小3・4	小5・6	中1	中2	中3
学	○じをかきましょう ○おもいだしてかきましょう ○かんじでかきましょう ○えにつきをかきましょう ○ことがらがたわるようにかきましょう ----- ○はがきをかこう ○しをかこう ●学しゅうのてびき（はじめは「や!」） ○「音」をさがしておはなづくり ○わかるようにかいてつたえよう（ようふくのきかた） ●学しゅうのてびき（ろくべえまってろよ）	●学しゅうのてびき（花いっぱいになあれ） ●学しゅうのてびき（はたるの一生） ○気もちをつたえよう ●みぶりや手ぶりをつかって話そう（スイミー） ○知らせたいことを手紙に書こう ○メモのとり方 ○ちがいをくらべて書こう ●学しゅうのてびき（あいさつのみぶりとことば） ○しを書こう ●学しゅうのてびき（かさこじぞう） ○つづき落語ばなしを作ろう ●学しゅうのてびき（ゴムでうごくおもちゃのしくみ） ○地いきの行事を友だちにほうこくしよう ●学しゅうのてびき（お手紙）	●学しゅうのてびき（つり橋わたれ） ●学しゅうのてびき（にせてだます／合図とするし） ○文章のまとまりとわかりやすさ ○考えを広げよう、まとめよう ○心の動きを分かりやすくつたえよう ●一人の作者の作品を読んでみよう（あらしの夜に） ○見てきたことを新聞にまとめよう ●学しゅうのてびき（ミラクルミルク） ○詩を書こう ●学しゅうのてびき（モチモチの木） ○詩を作ろう（写真が動き出す） ●学しゅうのてびき（冬眠する動物たち） ○案内状を書こう ○調べたことをほうこくしよう（今と昔をくらべよう） ●学しゅうのてびき（わにのおじいさんのたから物）	●学習のてびき（白いほうし） ○読むことと書くこと（要約） ●学習のてびき（むささびのひみつ／あめんぼはにん者か） ○まとまり（段落と分りやすさ） ○すじ道を立てて書く ○中心をはっきりさせて書こう（この前のこと、今どうなっている?） ●作品の楽しさを読んでみよう（ボレボレ） ○手紙を書こう（依頼状とお礼状） ○見学したことを書こう ●学習のてびき（手で食べる、はして食べる） ○詩を書こう ●学習のてびき（ごんぎつね） ○きやく本を作ろう（人物を生きたえがき出そう） ●学習のてびき（点字を通して考える） ●ミニギャラリーの解説委員になろう ○考えを明らかにして書こう（アイデアを提案しよう） ●学習のてびき（世界でいちばんやさしい音）	●学習のてびき（トゥーチカと飴） ●学習のてびき（和紙の心） ○筋道（論理をたしかめる） ○表やグラフを使って伝えよう ○分かったことを報告しよう ●言葉のおもしろさからよんでみよう（注文の多い料理店） ○随筆を書こう（わたし風「枕草子」） ●学習のてびき（くり返しのはたらき） ○意見（主張と根拠） ○話を作り上げよう（これであなたも作家になれる） ●学習のてびき（木竜うるし） ○短歌・俳句を作ろう ●学習のてびき（新聞の読み方を考える） ○手紙 ○分かりやすくしよう（地域観光案内をしよう） ●学習のてびき（大造じいさんとがん） ○五年生をふり返って	●学習のてびき（みちくさ） ○卒業レポートを書こう（予告編） ●学習のてびき（自分の脳を自分で育てる） ○文章構成の効果を考える① ○しょうかい文を書こう（委員会活動しようかいしょう） ●人物の願いや思いを読み取ろう（子供は「未来人」―手塚漫画にこめられた願い―） ○随筆を書こう（わたしが愛する○○） ●学習のてびき（メディア・リテラシー入門） ○読み取り方を変えてみる ○詩を書こう ●学習のてびき（きつねの窓） ○創作にチャレンジ（物語を創ろう） ●学習のてびき（世界危機遺産ガラバゴス） ●学校にありがとう ○文章構成の効果を考える② ○レポートをまとめよう（卒業レポートを書こう） ●学習のてびき（フリードルとテレジンの小さな画家たち） ○六年生をふり返って
校						
図						
書						

教 育 出 版	<p>○えとことばでかきましよう ○しらせたいことをかきましよう ○えにつき ○たのしかったことをかきましよう ----- ○メモをつかってしょうかいしよう ●がくしゅうのてびき (はたらくじどう車) ○じゅんじょよくかく (のりもののことをしらせよう) ●がくしゅうのてびき (りすのわすれもの) ○おはなしのつづきをかこう ○みじかいことばでかこう ●がくしゅうのてびき (うみへのながいたび) ●「おはなしどうぶつえん」でガイドになろう ●がくしゅうのてびき (みぶりでつたえる) ○したことをおもしろく出してく (かきたいことを一つえらんで) ○文をつくらう ●がくしゅうのてびき (お手がみ) ○こくごのがくしゅう (これまでこれから)</p>	<p>●学習のてびき (ひっこしてきたみさ) ○手紙でつたえよう ●学習のてびき (すみれとあり) ○見つけたことを書く (たんけんしたことをほうこくしよう) ○へんしんしてお話を作ろう ●学習のてびき (きつねのおきゃくさま) ○メモをもとに文章を書こう ●学習のてびき (さけがなくなるまで) ○順序よく組み立てて書く (生きもののことをせつめいしよう) ●学習のてびき (わにのおじいさんのたからもの) ○かんじたことを詩に書こう ●学習のてびき (ないた赤おに) ●「お話じゅつかん」を作ろう ●学習のてびき (きつつき) ○心にのこったことを書く (一年間のできことをふりかえって) ●学習のてびき (アレクサンダとぜんまいねずみ) ○国語の学習 (これから)</p>	<p>●宝物をしょうかいしよう (スピーチメモ) ●学習のてびき (消しゴムころりん) ○いろいろな手紙を書こう ●学習のてびき (めだか) ●本の仕組みを知ろう ○調べたことの中からえらんで書く (調べたことをほうこくしよう) ●日本語のひびきにふれる (俳句に親しむ) ○お話のすきな場面をくわしく書こう ●学習のてびき (わすれられないおくりもの) ●学習のてびき (くらしと絵文字) ○生き物のとくちょうを説明しよう ●学習のてびき (モチモチの木) ○まわりに目を向けて詩を書こう ●学習のてびき (のらねこ) ●「読書けいじ板」を作ろう ●学習のてびき (どちらが生たまごでしよう) ○つたえたいことを書く (強く心にのこっていることを) ●学習のてびき (おにたのぼうし) ○国語の学習 (これから)</p>	<p>●写真をもとにスピーチしようスピーチメモ ●学習のてびき (やい、とかげ) ○学級新聞を作ろう ●学習のてびき (アーチ橋の進歩) ●「じょうほうけいじ板」を作ろう ○事実を正しく伝える (見学したことを報告しよう) ●日本語のひびきにふれる (短歌の世界) ○物語の作り方をくふうしよう ●学習のてびき (一つの花) ●学習のてびき (花を見つける手がかり) ○資料をもとに説明しよう ●学習のてびき (ごんぎつね) ○はっとしたことを詩に書こう ●学習のてびき (ぞろぞろ一落語) ●学習のてびき (「便利」ということ) ○伝えたいことを書く (心の動きがわかるように) ●学習のてびき (夕鶴) ○国語の学習 (これから)</p>	<p>●学習のてびき (五月になれば) ○しょうかいのポスターを作ろう ●学習のてびき (言葉と事実) ●新聞を作ろう ○自分を中心人物にして物語を書こう ●学習のてびき (大造じいさんとがらん) ●世界遺産白神山地からの提言 (意見文を書こう) ○友達との関わりを詩に書こう ●学習のてびき (雪わたり) ●「読書すいせん会」を開こう ●学習のてびき (まのがの方法) ○自分の考えを明確にして書く (コラムを書こう) ●学習のてびき (みずさがしの旅) ○国語の学習 (これから)</p>	<p>●学習のてびき (薫風/迷う) ○学校案内パンフレットを作ろう ●学習のてびき (日本語をコンピュータで書き表す) ○随筆を書こう ●学習のてびき (川とノリオ) ●世代による言葉の違い (言葉カードを作ろう) ●学習のてびき (はくの世界、きみの世界) ○意見文を書こう ○俳句・短歌を作ろう ●学習のてびき (きつねの窓) ○自分を見つめて書く (表現方法を選んで書こう) ●学習のてびき (伊能忠敬) ○国語の学習 (これまでこれから、先輩からの手紙—六年間をふり返って—)</p>
三省堂	<p>○かいてつたえよう ○えにつきをかこう ●かんがえるために (おおきなかぶ) ●いぬのきもち ----- ●かんがえるために (あいしているから)</p>	<p>●かんがえるために (たろうのともしち) ●かんがえるために (つばめのすだち) ○じゅんじょに気をつけて書こう (このまえあったこと) ●考えるために (お</p>	<p>●考えるために (ピータイルねこ) ●考えるために (米と麦) ○あんないの手紙を書こう ○中心をはっきりさせて書こう (自分を</p>	<p>●考えるために (白いぼうし) ●考えるために (打ち上げ花火のひみつ) ○お願いやお礼の手紙を書こう ○楽しく書こう (み</p>	<p>●考えるために (カニモトくん) ●考えるために (「十秒」が命を守る) ○事がらを集め、整理して書こう (人とかかわりの中で)</p>	<p>●考えるために (竜) ●考えるために (宇宙時代を生きる) ○場面の様子で自分の思いと書き分けよう (自由な発想で—随筆—)</p>

三省堂	<p>○よくみてかこう (みのまわりのいきもの) ●かんがえるために(はうしのはたらき) ○かきとめておこう (わたしのよんだ本) ●かんがえるために(いなばの白うさぎ) ○おはなしをつくろう (きょだいなきよだいな) ●かんがえるために(なにながでできるかな) ●かんがえるために(夕日のしずく) ○はっきりつたわるようにかこう (できるようになったこと)</p>	<p>手紙) ○手紙をこうかんしよう ○なにをつたえよう としているの ○よくかんさつして 書こう(見て、聞いて、さわって) ●考えるために(きつねのおきやくさま) ●考えるために(たねのたび) ○つなかりに気をつけて書こう(わたしのはっけん) ●考えるために(かさこじぞう) ○お話をそうぞうしよう(きぜつライオン) ●考えるために(フレデリック) ○書いたものを読み合おう(みんなの思い出)</p>	<p>見つめて) ●考えるために(うさぎのさいばん) ○何をしているのかな ●考えるために(ぼくんち) ○つたえたいことに 合わせて書き方をくふうしよう(こんなやり方をおすすめします) ●考えるために(わすれられないおくり物) ○組み立てを考えて書こう(クラスの活動を調べよう) ○楽しい書き方を考えよう(カルタを作ろう) ●考えるために(おにたのぼうし) ○読む人のことを考えて、つたえ方をくふうしよう(三年生は楽しいよ)</p>	<p>んなの詩、わたしの詩) ●考えるために(いわたくんちのおばあちゃん) ○写真に題名をつけよう ●考えるために(夏海) ○理由をはっきりさせて書こう(お気に入りの場所) ●考えるために(ごんぎつね) ●考えるために(月のかげ絵) ○組み立てをくふうして書こう(新聞でニュースを伝える) ○想をくふくらませよう(故事成語の物語) ●考えるために(じゃんけんの仕組み) ●考えるために(あたまにつまった石ころが) ○書いたものを読み合い、考えたことをつたえ合おう(二十才のわたしへ)</p>	<p>●考えるために(競争) ○このあと、どうなる? ●考えるために(洪庵のたいまつ) ○伝えたいことを明確にして書こう(グループ新聞) ●考えるために(動物の「言葉」人間の「言葉」) ○効果的な組み立てをくふうして書こう(見学レポート) ○表現のよいところを見つけ合おう(句会を楽しむ) ●考えるために(コウノトリが教えてくれた) ●考えるために(大造じいさんとガン) ○自分の考えが深まるように書こう(心を動かされた言葉)</p>	<p>●考えるために(紅鯉) ●考えるために(まほう使いのチョコレート・ケーキ) ○表現の効果を考えて書こう(よさを伝える広告) ●考えるために(「なべ」の国、日本) ○自分の意見を明確にして書こう(説得力のある意見) ○表現のくふうを楽しもう(短歌を作る) ●考えるために(猿橋勝子) ●考えるために(雪わたり) ○自分の学びを本にまとめよう(世界に一冊の「マイブック」)</p>
東京書籍	<p>○じをかこう ○ぶんをつくろう ○よんでね、きいてね ○こんなことしたよ ○えにっきをかこう ○おもいだしてかこう ----- ●てびき(サラダでげんき) ○わたしのはっけん ●てびき(いろいろなふね) ○じゅんじょよくかこう ●てびき(おとうとねずみチロ) ○ことばあそびをしよう ●てびき(歯がぬけ</p>	<p>○「お話カード」を書こう ●てびき(たんぼぼ) ○よく見て書こう ●てびき(お手紙) ●てびき(ふろしきは、どんなぬの) ○できるようになったよ ○かんじたことを ●はなしたくないこと ○「ありがとう」をつたえよう ●てびき(名前を見てちょうだい) ○絵を見てお話をしよう ●てびき(ビーバーの大工事)</p>	<p>●てびき(すいせんラッパ) ○自分をしょうかいしよう ●てびき(自然のかくし絵) ○かんさつしたことを書こう ●てびき(ゆうすげ村の小さな旅館) ●話を聞いてメモをとろう ○心にのこったことを書こう ○案内の手紙を書こう ●てびき(名前を見てちょうだい) ○絵を見てお話をしよう ●てびき(ビーバーの大工事)</p>	<p>○心の動きを文章に書こう ●てびき(ヤドカリとイソギンチャク) ○わたしが選んだ今月のニュース ●てびき(走れ) ●メモの取り方をくふうして聞こう ●広告と説明書を読みくらべよう ○わたしの考えたこと ●「ことわざブック」を作ろう ○お願いやお礼の手紙を書こう ●てびき(ごんぎつね) ○連詩にちょうせんしよう</p>	<p>○メモを使って題材をさがそう ●てびき(動物の体と気候) ●てびき(世界でいちばんやかましい音) ○立場を明確にして書こう ○資料を読んで考えたことを書こう ●てびき(注文の多い料理店) ○ふしぎな世界へ出かけよう ●てびき(森林のおくりもの) ●てびき(大造じいさんとガン) ○活動したことを伝える文章を書こう</p>	<p>●てびき(風切るつばさ) ○表現を工夫して書こう ●てびき(イースター島にはなぜ森林がないのか) ●てびき(ばらの谷) ○「わたしの意見」を書こう ○資料を活用して書こう ●てびき(海のいのち) ○子供句会を開こう ●てびき(未来に生かす自然のエネルギー) ●てびき(ヒロシマ</p>

東京書籍	たらどうするの) ○たのしかったね、一年生 ●てびき(花いっぱいになあれ)	○じゅんじょをかんがえてせつ明しよう(二年一組、はつ明じむしょ) ●てびき(かさこじぞう) ○考えたわけを書こう ●てびき(虫は道具をもっている) ○「思い出ブック」を作ろう ●てびき(ニャーゴ)	○調べたことを整理して書こう(研究レポートを書こう) ●てびき(木かげにござり) ○くらべてわかったことを書こう ●わたしたちの町の行事をしようかいしよう ●てびき(人をつつむ形—世界の家めぐり) ○「わたしの作品集」を作ろう ●てびき(手ぶくろを買いに)	●てびき(くらしの中の和と洋) ○取材したことをもとに学級新聞を作ろう ●てびき(世界一美しいほくの村) ○目的に合わせて書こう ●てびき(ゆめのロボット) ○「十さいのわたし」文集を作ろう	(伝えよう、委員会活動) ●てびき(テレビとの付き合い方) ●てびき(手塚治虫)	のうた) ○ふるさとの良さを文章で伝えよう(ふるさとの良さをしようかいしよう) ●伝えよう、大切にしたい名言
光村図書	○どうぞよろしく ○すきなもの、なかに ○かけるようになった ----- ○よく見てかこう ●じどう車くらべ ○かるたをくつろう(あつまれ、ふゆのことば) ●ずうっと、ずっと、大すきだよ ●おみせやさんごっこをしよう ●たぬきの糸車 ●どうぶつの赤ちゃん ●だってだってのおばあちゃん ○おもい出してかこう(いいこといっぱい、一年生)	●ふきのとう ○今週のニュース ●たんぼほのちえ ○きろくしよう(かんさつ名人になろう) ●お話を読んで、かんそうを書こう(スイミー) ○お話のさくしゃになろう ●黄色いバケツ ●読んで考えたことを書こう(動物園のじゅうい) ●お手紙 ○しょうかい文を書こう(友だちのこと、知りたいな) ●読んで、せつめいのしかたを考えよう(おもちゃの作り方) ●きみたちは、「図書館たんていだん」 ●わたしはおねえさん ○詩を書こう(見たこと、かんじたこと) ●おにごっこ ●スーホの白い馬 ○文集を作ろう(楽しかったよ、二年生)	●きつつきの商売 ●ありの行列 ○ほうこくする文章を書こう(気になる記号) ●海をかつとばせ ○手紙を書こう ●いろはにほへと ●ちいちゃんのかげおくり ●すがたをかえる大豆 ○食べ物のひみつを教えます ●三年とうげ ○物語を書こう ●かるた ○ほうこく書を書こう(本で調べて、ほうこくしよう) ●モチモチの木	●白いほうし ●動いて、考えて、また動く ○調べたことを報告する文章を書こう(読書生活について考えよう) ●一つの花 ○新聞を作ろう ●かげ ●茂吉のねこ ●ごんぎつね ●アップとルーズで伝える ○「仕事リーフレット」を作ろう ● <u>物語を読んで、感想文を書こう(三つのお願い)</u> ○詩を書こう(野原の仲間になって) ●ウナギのなぞを追って ○調べて、まとめて、読み合おう(「ことわざブック」を作ろう) ●初雪のふる日	●のどがかわいた ●生き物は円柱形 ●百年後のふるさとを守る ○活動を報告する文章を書こう(次への一歩—活動報告書) ●自分の考えをまとめて、討論をしよう(豊かな言葉の使い手になるためには) ●大造じいさんとがん ●天気を予想する ○グラフや表を引用して書こう ●千年の釘にいどむ ●ゆるやかにつながるインターネット ●わらぐつの中の神様 ○物語を作ろう ●幽霊をさがす ●ニュース番組作りの現場から	●カレーライス ●生き物はつながりの中に ○町のよさを伝えるパンフレットを作ろう(ようこそ、わたしたちの町へ) ○短歌を作ろう(たのしみは) ●自分の考えを明確に伝えよう(平和のとりでを築く) ●作品の世界を深く味わおう(やまなし／イーハトーヴの夢) ●ものの見方を広げよう(『鳥獣戯画』を読む) ○読み取ったこと、感じたことを表現しよう(この絵、私はこう見る) ●私と本 ●森へ ●言葉は動く ○随筆を書こう(自分を見つめ直して) ●海の命 ●宇宙飛行士(はくがいだいた夢) ●変身したミンミンゼミ

《中学校》

	中 1	中 2	中 3
学 校 図 書	<p>○私のブックデザイン ブックカバー作品展</p> <p>●学びの窓（木精）</p> <p>●学びの窓（とらわれた心に突き立つ矢）</p> <p>●学びの窓（故事成語）</p> <p>○隠れた世界を知る（取材をまとめて記事にする）</p> <p>●学びの窓（シェークvs.バナナ・スプリット）</p>	<p>●学びの窓（昔話）</p> <p>●学びの窓（クリスマスの仕事）</p> <p>●学びの窓（地下水）</p> <p>●学びの窓（アラスカとの出会い）</p> <p>○想像する言葉（物語・詩を作る）</p> <p>●学びの窓（坊っちゃん）</p> <p>●学びの窓（走れメロス）</p> <p>○論を組み立てる（意見文を書く）</p> <p>●学びの窓（花いちもんめ）</p>	<p>●批評の扉（Water）</p> <p>●学びの窓（握手）</p> <p>●学びの窓（黒い雨）</p> <p>○批評する言葉（批評文を書く）</p> <p>●学びの窓（ディズニーランドという聖地）</p> <p>●学びの窓（運動会）</p> <p>●学びの窓（言葉が見た風景）</p> <p>●学びの窓（異界を捉える言葉）</p> <p>○あのとときかもしれない（エッセイを書く）</p> <p>●学びの窓（パール・ハーバーの授業）</p> <p>●学びの窓（顔の見える国際協力）</p>
教 育 出 版	<p>●みちしるべ（私の好きな言葉）</p> <p>●みちしるべ（花の形に秘められたふしぎ）</p> <p>●みちしるべ（暗闇の向こう側）</p> <p>●みちしるべ（オツベルと象）</p> <p>●みちしるべ（中国の名言—故事成語—）</p> <p>●みちしるべ（笑顔という魔法）</p> <p>●みちしるべ（自分の頭で考える？）</p> <p>●みちしるべ（言葉がつなく世界遺産）</p> <p>○「書く」学習を始める前に（自己紹介文を書く）</p> <p>○材料を集めて自分の思いや考えをまとめるには（図表を用いた読書ノートをつける）</p> <p>○構成を工夫して書くには（体験したことを題材に、随筆を書く）</p> <p>○根拠を明確にして書くには（芸術作品の鑑賞文を書く）</p> <p>○相手や目的に応じてわかりやすく書くには①（行事などの案内を書く）</p> <p>○相手や目的に応じてわかりやすく書くには②（行事などの報告を書く）</p> <p>○文章を読み合い自分の表現に生かすには（自分の作品の批評文を書く）</p> <p>○情報を選び効果的に伝えるには（図表を用いた説明）</p>	<p>●みちしるべ（タオル）</p> <p>●みちしるべ（夏の葬列）</p> <p>●みちしるべ（随筆の味わい）</p> <p>●みちしるべ（孔子の言葉）</p> <p>●みちしるべ（悠久の自然）</p> <p>●みちしるべ（ガイアの知性）</p> <p>●みちしるべ（走れメロス）</p> <p>●みちしるべ（学ぶ力）</p> <p>○資料を収集して自分の考えを書くには（地域レポートを書く）</p> <p>○構成のしっかりした文章を書くには（「新聞の投書欄」に対する意見文を書く）</p> <p>○心情が効果的に伝わるように書くには①（物語を創作する）</p> <p>○心情が効果的に伝わるように書くには②（詩を創作する）</p> <p>○感謝の気持ちを形にするには（社会生活に必要な手紙を書く）</p> <p>○できあがった文章を読み合うには（観点を決めて評価し合う）</p> <p>○立場を決めて意見を述べるには（根拠を明確にした意見文）</p>	<p>●みちしるべ（「新しい博物学」の時代）</p> <p>●みちしるべ（みどり色の記憶）</p> <p>●みちしるべ（不思議の国のアリス、読書記録）</p> <p>●みちしるべ（無言館の青春）</p> <p>●みちしるべ（旅への思い）</p> <p>●みちしるべ（和歌の調べ）</p> <p>●みちしるべ（歴史は失われた過去か）</p> <p>●みちしるべ（文化としての科学技術）</p> <p>●学習活動（情報を編集するしかけ）</p> <p>●みちしるべ（故郷）</p> <p>●みちしるべ（言葉の力）</p> <p>○文章の形態を選択して書くには（広告を批評する）</p> <p>○説得力のある文章を書くには（二つの投書を比較して、自分の意見を書く）</p> <p>○文章全体を整えて書くには（文体練習）</p> <p>○説得力のある文章にするには（意見文を書き直す）</p> <p>○文章を書きものの見方や考え方を深めるには（「手紙」を批評する）</p> <p>○テーマに合った文章を組み合わせるには（「私の作品集」を編集する）</p>
三 省 堂	<p>○一枚レポートを書こう</p> <p>○体験文を書こう</p> <p>●学びの道しるべ（空中ブランコ乗りのキキ）</p> <p>●学びの道しるべ（ユニバーサルな心を目指して）</p> <p>●学びの道しるべ（夕焼け／いるか／雨ニモマケズ）</p> <p>○鑑賞文を書こう</p>	<p>○<u>読書感想文を書こう</u></p> <p>●学びの道しるべ（壁に残された伝言）</p> <p>○意見文を書こう</p> <p>●学びの道しるべ（走れメロス）</p> <p>●学びの道しるべ（日本人はアリスの同類だった）</p> <p>●学びの道しるべ（短歌の世界）</p> <p>○見られる側の言い分</p> <p>●学びの道しるべ（小さな手袋）</p>	<p>●学びの道しるべ（おくのほそ道）</p> <p>●学びの道しるべ（中国の古典の言葉）</p> <p>○「私の友情論」を書こう</p> <p>●学びの道しるべ（冥王星が「準惑星」になったわけ）</p> <p>●学びの道しるべ（猫）</p> <p>○詩の魅力を伝えよう</p> <p>○主張文を書こう</p> <p>●学びの道しるべ（高瀬舟）</p>

三 省 堂	<ul style="list-style-type: none"> ○学校案内リーフレットをつくろう ●学びの道しるべ（信頼をつなぐ） ●学びの道しるべ（タオル） ○私のトップニュースを書こう ○「故事成語」を使って書こう ●学びの道しるべ（トロッコ） ○せりふと書き ●学びの道しるべ（食感のオノマトペ） ○未来を見つめる ○書く内容を決めるには ○書く材料を整理するには ○段落の役割を考えて構成するには ○根拠を明確にして書くには ○書いた文章を見直すには ○書いた文章を交流するには 	<ul style="list-style-type: none"> ○事典をつくろう ●学びの道しるべ（「循環型社会」とは何か） ●学びの道しるべ（蒼い道） ○手紙文を書こう ○物語をつくろう ●学びの道しるべ（日本語メガネのかけ替え） ○この人を語る ○書く材料を探すには ○伝えたいことを明確にするには ○説得力のある文章を書くには ○描写を工夫して書くには ○書いた文章を見直すには ○文章の工夫について交流するには 	<ul style="list-style-type: none"> ○好きな和歌を紹介しよう ●学びの道しるべ（初恋／うち知ってんねん） ○理想のロボット ○大切な言葉で編む ○取材を通して考えを深めるには ○目的に合った文章を書くには ○信頼できる資料を選ぶには ○文章を整えるには ○交流して評価し合うには
東 京 書 籍	<ul style="list-style-type: none"> ○小さな発見を詩にしよう ●課題（遠い山脈） ●課題（さんちき） ●課題（オオカミを見る目） ○図表を使って伝えよう（「私」の説明文） ●課題（矛盾） ●課題（脳の働きを目で見てみよう） ○根拠を明確にして書こう（意見文） ●課題（少年の日の思い出） ○案内や報告の文章を書こう ●課題（ニュースの見方を考えよう） ○鑑賞して良さを表現しよう（CDジャケット） ○話すこと・書くこと題材例 ○発想の方法 ○メモの取り方 ○原稿用紙の使い方・推敲の観点 ○手紙の書き方 	<ul style="list-style-type: none"> ●課題（短歌を楽しむ） ○短歌のリズムで表現しよう ●課題（字のない葉書） ●課題（卒業ホームラン） ●課題（食の世界遺産－鰯節） ○調べて考えたことを伝えよう（「言葉」のレポート） ●課題（枕草子） ●課題（平家物語） ●課題（漢詩） ●課題（恥ずかしい話） ○反対意見を想定して書こう（意見文） ●課題（走れメロス） ○依頼状やお礼状を書こう ●課題（情報検索で開ける世界） ○いきいきと描き出そう（俳句から始まる物語） ○話すこと・書くこと題材例 ○発想の方法 ○原稿用紙の使い方・推敲の観点（条件作文） ○手紙の書き方 	<ul style="list-style-type: none"> ●課題（俳句の読み方、味わい方） ○俳句を作って句会を開こう ●課題（形） ●課題（風の唄） ●課題（絶滅の意味） ○編集して伝えよう（「日本文化」のガイドブック） ●課題（万葉・古今・新古今） ●課題（おくのほそ道） ●課題（論語） ●課題（テクノロジーとの付き合い方／テクノロジーと人間らしさ） ○観察・分析して論じよう（批評文） ●課題（故郷） ●課題（「正しい」言葉は信じられるか） ○今の思いをまとめよう（時を超える手紙） ○話すこと・書くこと題材例 ○発想の方法 ○手紙の書き方 ○原稿用紙の使い方・推敲の観点（自己紹介文）
光 村 園 書	<ul style="list-style-type: none"> ●学習（にじの見える橋） ●学習（ちょっと立ち止まって） ○わかりやすく説明しよう（観点を決めて書く） ●豊かな言葉（言葉を集めよう・推薦文を書こう） ○美味しい読書（読書紹介をする） ●学習（星の花が降るころに） ●学習（大人になれなかった弟たちに） ○項目を整理して伝えよう（案内文を作る） ●学習（シカの「落ち穂拾い」） ●学習（今に生きる言葉） ●学習（流水と私たちの暮らし） ○調べたことを報告しよう（レポートに 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習（アイスプラネット） ○説明のしかたを工夫しよう（目的や相手に応じて書く） ●学習（やさしい日本語） ●豊かな言葉（言葉を選ぼう・小さな物語を作ろう） ●学習（盆土産） ●学習（字のない葉書） ○気持ちを込めて書こう（手紙を書く） ●学習（君は「最後の晩餐」をしているか） ●学習（扇の的） ●学習（仁和寺にある法師） ●学習（モアイは語る） ○立場と根拠を明確にして書こう（意見 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習（握手） ○説得力のある考えを述べよう（批評文を書く） ●学習（月の起源を探る） ○推敲して、文章を磨こう ●学習（挨拶） ●学習（故郷） ○文章の形態を選んで書こう（修学旅行記を作る） ●学習（君待つと） ●学習（夏草） ○お薦めの古典を贈ろう ●学習（ネット時代のコペルニクス） ●三年間の歩みを編集しよう（ポートフォリオを編み、語り合う）

光 村 園 書	まとめる) ●学習 (少年の日の思い出) ○感じたことを文章にしよう (鑑賞文を書く) ●言葉を探検する (ポスターセッションをする) ○学習に役立てよう ○発想を広げる ○いろいろな発想方法 ○書き方のポイント ○文章の推敲・原稿用紙の使い方 ○いろいろな通信文	文を書く) ●学習 (走れメロス) ○表現のしかたを工夫して書こう ●身近な人の「物語」を探る (インタビューをして文集にまとめる) ●学習 (言葉の力) ○学習に役立てよう ○発想を広げる ○文章構成の工夫 ○資料のまとめ方 ○手紙の書き方	○学習に役立てよう ○発想を広げる ○いろいろな文章形態

5. 読書感想文をめぐる言説

ところで、文部科学省は、国語力の向上という課題に対して、読書の有効性を説いている。2004年2月に出された文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」には、次のように述べている⁽⁷⁾。

〈子供たちの「読書意欲」を高める〉

前出の「学校読書調査」によれば、学校や家庭で「本をすすめたり、本の話をしたり、読んでくれる人がいる」と回答した児童・生徒の割合は、小学校から、中学校、高等学校へと進むにつれて下がる。また、「何を読んだらよいか分からない」児童・生徒が多いことも同調査で指摘されているが、このような実態を踏まえて、学校では、個々の子供たちの状況に応じたきめ細かな読書指導を行っていくべきである。

読書については、「本を読むこと自体が楽しい」という読み方を学校教育の中で教える必要があり、これまでの教育では、読むことの楽しさを教えることに失敗しているのではないかと考えられる。さらに、学校教育の中で、なぜ読む必要があるのか、なぜ読んだ方が「生きる力」になるのかなどについて考えさせることも大切である。

読書指導においては、子供と本との橋渡しをする教員の役割が極めて大切であり、教員の読書指導の質が問われることになる。読書指導における教員の姿勢は重要で、「本を読まない教員は求められていない」と言うこともできる。実際、子供たちの読書意欲を高めるために、本の楽しさについて常に語り掛けたり、読書通信等を活用して、教員が自ら読んだ本の紹介や子供たちに勧めたい本の一覧を発信したりするなど、様々な取組も行われている。しかし、すべての教員が積極的に取り組んでいるわけではない。

教員自身が本を読んでいることが求められるのは当然であり、教員が自らの読書経験を踏まえながら、個々の子供たちの置かれている状況やそれぞれの考え方・感受性等にきめ細かく配慮した読書指導を適切に行うことが求められる。例えば、読書感想文を書くこと自体は子供たちの国語力を向上させる有効な方策の一つであるが、一律に、読書感想文を強制するなど子供たちに過度の負担を感じさせてしまうような指導では、子供たちが物語の中に入り込めず、読書を楽しむことができない。常に子供たちの状況を的確に把握し、意欲を出させるための取組が必要である。

読書感想文に関しては、「書くこと自体は子供たちの国語力を向上させる有効な方策の一つ」としているものの、これを「一律に」「強制するなど子供たちに過度の負担を感じさせてしまうような指導」には問題があることも指摘している。

実は、この読書感想文については、文筆家・作家などを中心に根強い反対論がある。ここでは井上ひさしと清水義範の言説を紹介する。どちらも独自に作文教室を開設し、一般の大人や子どもの作文力向上に努めた経験を持っている。

まず、井上ひさしは『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』において、次のように指摘している⁽⁸⁾。

○丸谷才一さんの言葉を借りますと、日本の国語教育は、全生徒をすべて小説家か詩人にするつもりでいると。これが日本の国語教育の根本的な欠陥です。つまり芸術鑑賞とか、文学鑑賞とか、人の心を動かす文章を書かせようとするわけです。こんなの、子どもに無理ですね。大人だって無理なことを、なぜ子どもに要求するのかよくわかりません。

○それから一冊の本を読ませてこれを四百字に縮めなさい、とか。そういうことなら、子どもたちは、ちゃんとできます。日本の国語教育は、いっさいそれをやっていないんです。みんな文学的なことばかりやっているんです。学校の先生方もそういうことが好きなんです。文部省も好きなんです。

○それから、特に読書感想文が問題ですね。これは本当に子どもにとっては地獄の責め苦だと思います。おもしろい本を、ある意味では無責任にどんどん読めばいいのです。それなのに、読んだ後に感想を書きなさいと要求する。(中略)ですから、大人が子どもにまちがったことを要求しているのです。子どもは、どんどん嫌いになります。大人がその愚に気がつかない間は、日本の文章教育はまちがった方に進んで行って、大人になっても何も書けない人間が出てくるわけです。

また、清水義範は『わが子に教える作文教室』において、次のように述べている⁽⁹⁾。

○子供の夏休みの宿題に、読書感想文を書け、というのがあって、多くの子にとっては大変な苦痛になっている。私の考えでは、読書感想文を書かせるのはいい宿題ではない。あれはむしろ害のほうが大きいほどだと思う。なぜなら、小・中学生にとって、読書感想文を書くのはむずかしすぎるからだ。本を読んでその感想を書けというのは、要するに書評のようなものを書けと言っているわけで、そんな高度なものが子供に書けるわけがない。しかも、読書感想文を書くということには、よい子ぶりましょう、おりこうぶりましょう、という臭みがプンプン漂っている。推薦図書の中から一冊を読んで感想を書くというやり方の中に、とてもいい本で感動しました、と言うしかないという圧迫がある。何かうまいお世辞を言わなきゃいけないんだ、と思って本を読むなんて苦痛で、本を読むことまで嫌いになってしまうのだ。(中略)とにかく、子供に本を読ませたとして、感想を聞いてはいけない。感想とは、本を読んだだけで胸の内に生じるもので、しかも時間がたつにつれ育ってくるものなのだから、それをすぐさま、何かうまいこと言ってごらん、と導き出すなんて、本嫌いを育てているようなものだ。

○先生が喜ぶような読書感想文を書こうとするのは、実は気の重いことである。だから子供は、感想文のせいで、他の作文を書くことまで嫌いになる。そして、本を読むことまで苦痛に感じてしまう。そういう意味で、読書感想文は百害あって一利なしなのだ。

井上ひさしと清水義範は、読書や作文の効能を大いに認めつつも、こと読書感想文の作成を強いることに対しては、かえって読書嫌いや作文嫌いを助長しかねないとして、危惧の念を表明しているのである。

6. 学校現場における読書感想文指導

それでは、学校現場においては、実際に如何なる読書感想文指導が行われているのであろうか。次に、管見に入ったものの中から主なものをあげる。この中で中核として位置づけられるものは、新潟市の小学校教諭(当時)・山田加代子の提唱した所謂「山田式読書感想文指導法」に則った指導法の如くに考えられる⁽¹⁰⁾。山田は、指導した読書感想文を内閣総理大臣賞、文部大臣賞、図書館協議会長賞などの受賞に導いたカリスマであった⁽¹¹⁾。

○市毛式作文指導法(早稲田大学教授(当時)・市毛勝雄による指導法)

- ① 「はじめ」「なか1・なか2」「まとめ」「むすび」の四段構成(起承転結)になっている。(文章構成の形式)
- ② 各段落に書く内容と、その分量を示している。
- ③ 書く順序を示している(なか1・2→まとめ→むすび→はじめ→題)

○山田式読書感想文指導法(山田加代子による指導法)

- ① 本の中で一番心に残った事柄、初めて知ったことを書かせる。

- ② ①で書いたことと合致する自分の体験や考えを書かせる。
 - ③ ①と②を比べて、自分の考えを書かせる。
 - ④ 本を読んで得たことやこれからどう考えていきたいかを書かせる。
- 寺崎型分析批評を応用した読書感想文指導法（富山県の中学校教諭・門島伸佳による一連の指導法）
- ① 読書感想文は「感想文」ではない。「生活体験作文（読書体験作文）」である。まずは意識の転換が必要である。
 - ② 書き出しは作品と関連した「自分の体験」を書く（目安は原稿用紙1枚）。
 - ③ あらすじはまとめて書き、自分なりの解釈をプラスする（目安は原稿用紙1枚半）。
 - ④ 「題名」にこだわる。
 - ⑤ 「作品」と「自分の体験」との関連性を書く（目安は原稿用紙1枚）。自分自身の心が作品と出会うことによってプラスの方向に転換したこと（つまり、自分の心が成長したこと、大人に一步近づいたこと）を書く。
 - ⑥ 基本的な構成は「はじめ・なか・おわり」の三部構成とする。
はじめ（体験）＋なか（作品）＝おわり（心の転換・成長）
 - ⑦ 自分が本当に感動した作品を選ぶ。
 - ⑧ 作品は必ず「ペン書き清書」で書き上げる。

この他、試みにインターネットをのぞいてみると、種々様々な指導法が数多く紹介されている。中には誰か（例えば主人公）に語りかけるような口調で書くことを勧めるものもあった⁽¹²⁾。

総じて、ある形式（型）にはめ込んだ上で、具体的な「自分の体験」を盛り込み、より自分のものとして消化している様を強調しようとする、パフォーマンス重視の指導法の如くである。上手に「書くこと」を目的にはしているが、そこで言うところの「上手」さとは、より審査員にアピールして、上位入賞を果たそうとする技術（わざ、すべ）の熟達を目指しているように思えてならない。

7. 新潟県の事例から見えてくる課題

筆者は、現在新潟県小学校図書館協議会が主催する「新潟県課題図書読書感想文コンクール」ならびに「青少年読書感想文コンクール」の審査委員長を務め、また新潟市・坂井輪中学校区青少年育成協議会が主催する「私の主張大会」の審査委員長も務めている⁽¹³⁾。前者は小学校における読書感想文を対象とし、後者は小・中学校における意見文・主張文を対象としているので、学校種や書かれた文章の内容は当然異なっている。

ところが、読書感想文に関しては、全体を通して極めて画一的だという印象を持っている。無論、細かく見れば、内容は区々それぞれであるのだが、文章の構成や述べ方がどれもこれも似ていることが気になっていた。読書感想文であるにもかかわらず、「自分の体験」が大半を占め、それに基づいて意見を述べているものがほとんどで、中には三分の二ほどが「自分の体験」であるものさえあった。それは、前節で述べた、形式（型）にはめ込まれた、画一化された読書感想文指導法によって作成されたためであると、容易に推察することができた。さらに、より問題なことは、審査委員の多くもまた、こうした読書感想文指導法にどっぷりと浸かっていると思われることである。

3年前、小学校の読書感想文の審査に従事し始めた頃の筆者は、審査の席上、作品のほとんどが多くの紙幅を割いて「自分の体験」を記述していることに対して疑義を呈したのであるが、学校現場から選出された委員から、「読書感想文とはかくあるものだ」と教えられた。それ以来、筆者は疑義をはさめぬことにしたのであるが、この生活綴り方的な、意見文の色彩が濃い文章が、本来的な読書感想文だとは思っていない。新聞社の文化部に所属する委員もまた、大いに違和感を覚えた様子であった。

ちなみに、第4節に述べた、小学校の国語教科書に唯一取り上げられていた読書感想文教材「物語を読んで、感想文を書こう（三つのお願い）」（光村図書、4年生）を詳しく見ると、次のような問いが設定されている。

☆「ノービィ」とした体験はありませんか。次のどれかについて、一、二文で書きましょう。また、そ

のときあなたはどう思ったのかを書き足しましょう。

- ・小さなことがきっかけで、友達とけんかをした体験。
- ・けんかをした相手と仲直りをした体験。
- ・身近な人の言ったことに心を動かされた体験。

「ノービィ」とは、この物語の主人公である。すなわち、学習者（読者）に主人公と似たような体験をしたことがないか尋ねて「自分の体験」を想起させ、主人公と同調・共鳴させようとする仕掛けである。これは正に、上述した読書感想文指導の現状が、ありのままに投影された内容と見て間違いないだろう。

本教材では、「次のような組み立てで書きましょう」として、構成の仕方まで指示されている。すなわち、「終わり」の部分については、「読んで、自分の何が、どう変わったかや、これからどうしたいかを書く」と指示されていて、意見文ないしは主張文のような内容・構成となっているのである⁽¹⁴⁾。

さらに加えて、課題図書の内容に関して、批判的な記述が全く見当たらないことも不可思議なことだと思っている。本を読んで、物事を見て、経験してみても、すべての人が一様に「すばらしい」と思うこと・ものはあるだろう。昨年のラグビーワールドカップにおける日本代表の活躍には、誰もが盛大な拍手を送った。しかし、大抵のことには批判的な見方をする人、否定的な意見を言う人がいる。例えば、当該のラグビーで言えば、あまりもの大差がついたスコットランド戦について、もっと何とかなったのではないか、という意見を数多く聞いた。それは普通のことである。ところが、読書感想文に関しては、図書の内容について批判的な意見を述べることは、ほとんどないと言っても過言ではないのである。

今年度、次のような事例があった。

小学校高学年用の課題図書に選定された『空へ』（いとうみく著）は、次のような内容であった⁽¹⁵⁾。

父親がクモ膜下出血に脳梗塞を併発して急死してしまった、小学校6年生の佐々木陽介は、母親とまだ幼稚園児の妹・陽菜（ひな）と3人でのアパート暮らしを始める。母親は家計を支えるために、スーパーのパートなどをして必死に働き、ついに正規の職（職種は不明）を得る。ただ、母親は残業で帰宅が遅くなることが多く、妹のケアは必然的に陽介が担当しなければならなくなってしまう。

サッカーが大好きな陽介は、中学校入学後サッカー部に仮入部はしたものの、妹が一人っきりになってしまふのがかわいそうで、やむなく（帰宅部員が多い）美術部に入る。いつかはサッカーをやりたいと思いつても、家族思い、わけでも妹思いの陽介は、自分の気持ちをセーブし、家族のために献身する。

そんな時、陽介は母親から「できないことを」しかたない”ってあきらめるんじゃなくて、いま大事だと思うことを、かあちゃんは自分で選択したの。選んだの」、「陽介にも、ちゃんと自分で選んでほしい。うちがこうだから、こうしなきゃならないって、そんなふうに考えてほしくない」、「あきらめるんじゃなくて、選ぶの。考えて、ちゃんと自分で」などと言われてしまう。

筆者（鈴木）は、この時点で、家族のために我慢に我慢を重ね、耐えに耐えてきた陽介に対して、そもそも「選ぶ」余地などなかった陽介に対して、この母親は何て辛辣なことを言うのだろうと思った。率直に感想を言えば、勝手に理不尽な人だとさえ思った。確かに、母親は一家を支えなければならないわけだから、もっと大変な思いをしているのであろうが、妹の世話は全部陽介が担当しているのである。妹が高熱を發したこともあった（この時はアパートの隣室のお姉さんがお粥を作ってくれた）。小学校入学以来、学童クラブから帰宅した妹は、一人っきりで家族の帰りを待つことになった。食事のこともある。そんな中で、好きなサッカー部を「選択」することなどできるわけがないのだ。それとも、母親は陽介に対して、家族を支えることを、自ら進んで肯定的に「選択」しろとでも言うのだろうか、とも思った。

ところが、この課題図書について書かれた（少なくとも最終審査に残った）読書感想文の総てが、母親のこの言を肯定的にとらえていたのである。心に響く、すばらしいことばだというのである。

これに強い違和感を持った筆者は、審査の席上、課題図書の内容について、特に主人公を中心とする登場人物たちの言動に対して、肯定的な意見ばかりでなく、否定的・批判的な意見、疑問点を述べることも大事だということを審査員たちに伝えた。皆一様に、驚きの表情であった。

審査委員会終了後、複数の若いスタッフから、「課題図書を批判的に読むということを初めて聞きました。そういう本の読み方もあるのだと初めて知りました」という言を聞いた。常々、物事を相対化して取り扱い、

文章はクリティカルに読むという読み方に馴染んでいる筆者にとっては、逆にその反応は新鮮な驚きであった。それと同時に、理解が広がるかもしれないという希望を持つこともできた。

この点に関して、井上ひさしと清水義範の前掲書に示唆的な指摘がある。

まず、井上ひさしは次のように述べている⁽¹⁶⁾。

○子どもがせっかく答えを出しても、大人が用意した答えに合わない、まちがいのになっちゃうんですね。子どもにとって踏んだり蹴ったりです。

また、清水義範は次のように指摘している⁽¹⁷⁾。

○多くの小学生は、学校で、先生に言われて書く作文には、先生が不機嫌にならないことを書かなきゃいけないと、本能的に感じ取っている。そして、だから作文が嫌いなのである。つまり、先生に読まれる作文とは、自由に自分の思いを書いていいものではないのだ。このことは、読書感想文の弊害について述べた時にも少し触れた。学校の推薦図書について感想を書くとなれば、どうしたって、とてもいい本で感動しました、という方向で書くしかないと思ふのだ。いい子ぶってそんなお世辞を書かなきゃいけないのは、気の重いことである。それと同じことが、作文のすべてについて言える。子供にとって作文とは、大人が安心する範囲で書かなきゃいけないものなのだ。

○そういうワクをとっばらって、自由に作文を書かせてやりたいと私は思う。よい子ぶりっこしなくてもいいんだ、と思うだけで、子供の作文は生き生きしてくるのだから。指導する側からいうならば、作文には何を書いてもいいんだよ、と導いてやろう、ということであり、別の言い方をすると、作文を、書いてあることの善悪で評価してはいけない、ということだ。

井上ひさしと清水義範は、子どもは読み手として教師や大人を意識して書くものだと言っている。しかも子どもは、できれば読み手に好印象を持ってもらいたいのである。だから、清水が言うように、「学校の推薦図書について感想を書くとなれば、どうしたって、とてもいい本で感動しました、という方向で書くしかない」のである。ここにも、現行の読書感想文をめぐる手かせ・足かせがあるように思われる。

8. 「書くこと」指導への提言

文章（あるいは本、以下同）は必ず相対化して、クリティカルに読むべきである、と筆者は考えている。そうでなくては、文章を真に正しく読解することはできないからである。これまで指摘してきたように、「書くこと」は「読むこと」と表裏一体であることが多く、また「書くこと」は「読むこと」を基点とすることが少なくない⁽¹⁸⁾。そういう意味では、「読むこと」から始まり「書くこと」へとつながる読書感想文は、その典型とすることができる。

「読むこと」は、必然的に自分という存在を離れて行われることはない。すべて自分を通して読み、理解するはずである。しかし、そこで感じたり、気がついたりしたことを記述することはあっても、本来は全く関係ないはずの「自分の体験」を大々的に盛り込むことは、当該の文章に対して礼を失することである。何でもかんでも自分に引きつけてしまうことは、極言すれば作品に対する一種の冒瀆でさえある。

また、文章に対して面白かったことや気に入ったことだけを記述するのは、片手落ちである。対立する観点ごとに、整理してみればわかることであるが、面白かったこと・気に入ったことの対極には、面白くなかったこと・気に入らなかったことがあり、理解できたこと・同調できたことの対極には、理解できなかったこと・同調できなかったことがあるはずである。

- | | | |
|-------------------|---|-------------------------|
| 面白かった・気に入ったこと（表現） | － | 面白くなかった・気に入らなかったこと（表現） |
| 理解できた・同調できたこと（表現） | － | 理解できなかった・同調できなかったこと（表現） |
| 〇〇のこと | － | 〇〇でなかったこと |
| △△のこと | － | △△でなかったこと etc |

これらを洗いざらいピックアップし、分類・整理する。その際、とりわけ自分には否定的に映ったこと、疑問に感じたこと、すなわち右側のサイドに並んだ諸点について、そう思った理由を考え、その答えを考え抜くことが、文章の深い読解につながるはずである。

作者がその文章において伝えたかったこと、中心を占める思想は何なのかを考えることは大事である。しかし、上記のようなクリティカルな読みをすることが、結果的に書かれた内容の客観性を担保することになるのである。

論理的思考力の育成が喫緊の課題だとされる今日、現行の「自分の体験」だらけ、主観満載の生活綴り方的、意見文的な読書感想文の作成を目指す指導から脱却し、クリティカルな読みに支えられた、客観的な鑑賞文・書評文の作成を目的とする指導へと、大きく舵を切る時期に来ているように思われる。言わば、読書感想文の質的な転換である。学習指導要領に照らせば、小学校においては、書籍に関する要約文や紹介文などを作成させることによって、正確に内容を読み取ってまとめる能力や、読み取った内容を順序立て、要領よく伝える能力の育成を行い、中学校においては、鑑賞文や書評文などを作成させることによって、主観に流されずに読み味わう能力、客観的に批評する能力の育成を図ることが望ましいのではないかと考えている。

文化審議会の答申に言われるまでもなく、読書の効用には大なるものがある。要は、子どもたちが読書嫌いや作文嫌いにならないように、発達段階に合わせたアウトプットの仕方を慎重に選択する必要があるということである。

9. むすびに代えて―「書くこと」は書きことばで―

ところで、筆者は前稿「話しこと・聞くこと」指導への一提言」において、ことばは音声言語の「話しことば」と文字言語（書記言語）の「書きことば」の二つに大きく分けられること、この二つには種々相違点が認められることを述べた。いま、煩を厭わずその部分を引用してみたい⁽¹⁹⁾。

	話しことば（音声言語）	書きことば（文字言語）
総論	① ことばとしてやさしい。 ② 聞き手の前から即座に消滅する。 ③ 話し手は緩やかな論理の組み立てが必要。 ④ 聞き手は読み手のような自由がなく、注意・緊張が要求される。	① ことばとして難しい。 ② 読み手の前に保存される。 ③ 書き手は複雑な論理の組み立てが可能で、時間的に余裕がある。 ④ 読み手は理解に応じた読み方の調節が可能で、速度も意のまま。
各論	ことばとしてメリット ① 感情表現が豊富。 ② 話す時に緊張感を伴わない。 ③ 声の調子が利用できる。 ④ 表情、身振り・手振りが利用できる。 ⑤ 相手の反応を見ながら補訂できる。 ⑥ 意思の疎通が図りやすく、内容の伝達がしやすい。	ことばとしてデメリット ① 感情表現に乏しい。 ② 書く時に緊張感を伴う。 ③ 声の調子を利用できない。 ④ 表情、身振り・手振りが利用できない。 ⑤ 相手の反応を見ながら補訂できない。 ⑥ 意思の疎通が図りにくく、内容の伝達がしにくい。
的	ことばとしてデメリット ① 時間的に制約がある。 ② 時間的・空間的に離れたところへの伝達は（本来的には）不可能。 ③ 反省的な意識では話せない。 ④ 複雑な論理は不可能。 ⑤ 感情が直接伝わり、誤解されやすい。 ⑥ 初対面や気心の知れない人に、気後れや戸惑いを感じる。	ことばとしてメリット ① 時間的に制約がない。 ② 時間的・空間的に離れたところへ伝達が可能。 ③ 反省的な意識で書ける。 ④ 複雑な論理が可能。 ⑤ 感情が直接伝わらず、誤解されにくい。 ⑥ 初対面や気心の知れない人に、気後れや戸惑いを感じない。

一見して明らかなように、「話しことば」と「書きことば」とは全く正反対であって、一方でことばとしてメリットとなる項目は、他方ではことばとしてデメリットとなっている。こうした関係を「相補関係」ないしは「補完関係」というが、約80年間を要した「言文一致運動」を経てもなお、如上の対立点が看取されることよりすれば、両者には本質的な差異があることを認めざるを得ない。

前稿は、「話すこと・聞くこと」指導について論述したもので、話す際には「話しことば」を使用すべきこと、ないしは「話しことば」の特徴を踏まえた表現方法を心掛けるべきことを述べたものである。したがって、「書くこと」指導を取り扱った本稿においては、書く際には当然「書きことば」を使用すべきこと、「書きことば」の特徴を十分に踏まえた表現方法を採るべきことを、最後に指摘しておかなければならない。さらに、最近の読書感想文に散見する接続詞「なので」「だけど」、接続助詞「～けど」、副詞「すごい」(例、すごい速い)、接頭語「ちょう」(例、超嫌なこと)、所謂「ラ抜き言葉」などは、俗語的な「話しことば」である⁽²⁰⁾。こうした語彙レベルの指導も、是非とも徹底して行いたいものである。

〔注〕

- (1) 桑原浩二「書く力を育成する国語科学習指導法の研究—小学校高学年を対象として—」(2015年度新潟大学大学院教育学研究科修士論文)、168-169頁。
- (2) 桑原浩二「書く力を育成する国語科学習指導法の研究—小学校高学年を対象として—」(2015年度「国語科教材開発研究特論Ⅱ」発表資料、2015年12月18日)、1頁。
- (3) 日本教材文化研究財団「研究紀要」第39号、2010年3月。
- (4) 『小学校学習指導要領解説・国語編』(東洋館出版社、2008年8月) 18頁、『中学校学習指導要領解説・国語編』(東洋館出版社、2008年9月) 17頁。
- (5) 『小学校学習指導要領解説・国語編』19頁、『中学校学習指導要領解説・国語編』18頁。
- (6) 小学校の教科書は2015年度に改訂が行われたが、中学校の教科書は2016年度に行われることになっている。双方を揃えるために、調査は旧版で行った。
- (7) 文部科学省文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(2004年2月)、「Ⅱ これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について、第2 国語力を身に付けるための読書活動の在り方、(3) 望ましい「読書指導」の在り方」による。
- (8) 新潮文庫、2002年。初版は仙台の出版社「本の森」、1998年。引用は164頁、166頁、168頁。井上には、この他『私家版日本語文法』(新潮文庫、1984年)、『文章読本』(新潮文庫、1987年)など、日本語やことばに関する著作が数多くある。
- (9) 講談社現代新書、2005年。引用は133-134頁、136頁。清水には、この他本書の姉妹編のような位置づけとなる『清水義範の作文教室』(ハヤカワ文庫、1999年)がある。
- (10) 主に次下によって記述した。
大森修『市毛式生活作文&山田式感想文の技術』明治図書、1994年。
門島伸佳「「分析批評」による文学教材の読み書き関連指導の実践的研究—思考力の関連による読書感想文指導への応用—」(『第110回全国大学国語教育学会・岩手大会発表要旨集』、2006年5月)。
- (11) 新潟大学教育学部パートナーシップ事業にてお世話いただいている、燕市教育委員会の武藤真理子嘱託指導主事(かつて新潟市内の小学校にて山田と同僚であった)の直話では、山田の読書感想文指導は余人の追隨を許さぬものであったようである。
- (12) 例えば、静岡県小学校教諭(当時)・柴田克美による読書感想文指導法は、次下の如くである。
 - ① 感想文を読んでもらう相手を決めて書く。
 - ・主人公に向けて手紙のような形式で書く。すると文が生き生きしてきます。
 - ・作者に向けて書く。相手を決めて書くと、それだけで文が訴える文になり、力がでてきて引きしまります。
 - ② もし、ぼく(わたし)だったら、こうするということを書く。
 - ・もし、自分が主人公だったらこういうふうに行動するということを書く。
 - ・自分の体験を入れながら書くと、説得力が増す。
 - ③ あたま、どう、しっぱ、を考えて書く。
 - ・頭は、ただ一点どこが心に残ったか、おもしろかったかを書く。
 - ・胴(どう)は、そのわけを書く。自分ならどうするか、経験したことと比べて書く。

・しっぽは、こんなふうになるといいとか、わかったことや、自分の過ごし方（生き方）で、変えられそうなことを書く。

・本を読んで「これからの生活をこうしていくぞ」ということがあるといい。

以上の3点に注意して書くだけでも、「あらすじ」からぬけでることができます。

（右は、「読書感想文の書き方（柴田克美先生）」<https://edupedia.jp/article/5447bbe4ddab6dc46ef32685>、及び「柴田克美教育大全集」<http://pinokio.blog.jp/archives/7530236.html>、2016年1月20日アクセスによる。）

この読書感想文指導法の特徴は、従来の生活文的要素だけでなく、手紙文のように、誰か相手を決めて（例えば主人公に対して）語りかけるような口調で書くことを推奨している点である。この語りかけ口調の読書感想文は、後述する新潟県における「読書感想文コンクール」においても、低学年を中心に多数看取されるスタイルである。

(13) 「読書感想文コンクール」は2013年度から、「私の主張大会」は2006年度から担当している。

(14) 中学校において唯一取り上げられていた「読書感想文を書こう」(三省堂、2年生)では、「書きだしの例」として「もし、同じ状況に私がいたら…」、「結論の例」として「私にも同じような…」という記述があった。これもまた、現行の読書感想文指導の投影だと考えるが、それ以上の文言や指示は見受けられなかった。

(15) 小峰書店、2014年。高学年の課題図書としては、この他岡田依世子『夏休みに、翡翠をさがした』（アリス館、2014年）、あんずゆき『ツリークライミングはぼくの夢 ジョン・ギャスライト〜木のほりにかけた人生〜』（佼成出版社、2014年）があった。

(16) 引用は、注（8）文献166頁。

(17) 引用は、注（9）文献149頁、156頁。

(18) 第4節でも述べたように、国語教科書における実質的な「書くこと」指導は、「書くこと」領域として明示されているもの（○印）以外に、「読むこと」など他領域のもの、または「書くこと」を含んだ複合領域的な取り扱いがされているもの（●印）からも認められるのである。むしろ●印の方が多数を占めていて、「話すこと・聞くこと」領域からも認められる。

(19) 拙稿「「話すこと・聞くこと」指導への一提言」（『新大國語』第37号、2015年3月）第4節。内容的には、松村明『国語表現法』（おうふう、1975年）を参照した。引用に際しては、わかりやすさを考慮して一部図表化した。

(20) 接続詞「なので」については、若年層を中心に中高年に至るまで、終にはアナウンサーなど放送に携わる職業人に至るまで、「話しことば」として広汎に使用されていることが報告されている（北原保雄『問題な日本語』大修館書店、2004年など）。しかし、いまだ「書きことば」として認知されているとは言い難い。ところが最近では、正しい日本語を使うべき大学入試の解答や、大学生のレポートからも容易に見出すことができるようになった。接続助詞「～だから」から生まれた接続詞「だから」が、次第に認知されるに至ったように、何れ接続助詞「～なので」から生まれた接続詞「なので」もまた、『広辞苑』に登載される日が来るかもしれない。が、現時点ではやはり俗語的な「話しことば」として取り扱い、書く際には極力使用を避けたいことばの一つである。むしろ、「俗語的」と付加した如く、筆者は「話しことば」としても適切なものだとは考えていない。

なお、ここに掲げた俗語的な「話しことば」は、すべて前述した2015年度「読書感想文コンクール」の応募作品から看取されたものである。

【附記】

本稿は、2016年1月25日に開催された、平成27年度・第10回燕市中学校国語担当者会議（新潟大学教育学部パートナーシップ事業）において講義を行った内容に基づくものである。突然の大雪の中、燕市立小池中学校まで往復に5時間近くを要したイベントであった。

内容的には、前稿の姉妹編として位置づけている。とは言え、前稿が「話すこと・聞くこと」指導を標榜しながらもスピーチ活動を中心に据えたように、本稿もまた「書くこと」指導の中でも読書感想文指導に焦点化したものである。羊頭狗肉の誹りは免れないかもしれないが、大方のご批正をお願いする次第である。

なお、論中やや批判的とも受け取られかねない部分があるかもしれないが、小論の目的は小・中学校現場における「書くこと」指導、就中読書感想文指導の刷新にあるだけであって他意はない。伏して諒解願いたい。

－平成28年3月3日成稿－